



伝わらなければ意味がない

■ 結城 浩

20年以上、私は本を書いてきました。プログラミング言語の入門書や、デザインパターンや暗号などの技術書をずっと書いてきて、ここ数年は『数学ガール』という数学読み物を書いています。

「いろんな分野の本を書かれるんですね」とよく言われますが、自分の目から見ると、私はいつも同じ活動をしているように思います。

プログラミング言語は初心者には分かりにくいものです。ややこしい文法をどう理解すればいいのか、どのように考えればプログラムになるのか、そんなことを人に分かりやすく伝えようとしているうちに、いつのまにか本になりました。

とあるデザインパターンの本を書店で見かけたとき、「この本には価値のあることが書かれているけれど、これでは読者が理解するのは困難だ」と感じました。「この本が伝えたいことを、もっと分かりやすく書こう」と書店で決心し、デザインパターンの本を書きました。

暗号技術の本を書いたときは、ややこしく入り組んだ暗号技術を図示し、その相互関係が読者によく伝わるように腐心しました。

数学は、単元というくくりを越えて味わえば、多くの人にその魅力が伝わる科目です。それを読者に伝えたくて、物語形式で『数学ガール』を書きました。

こんなふうに自分の執筆活動を振り返ると、ほとんどが「ややこしいけれど伝える価値のあるもの」を「読者にしっかり伝えよう」としていることに気がきます。つまり私は、読者の「なるほど」を目指して本を書いているのです。

■ 結城 浩
作家・ライター・プログラマー

1963年生まれ、『数学ガール』作者。
2014年度日本数学会出版賞受賞。
Web: www.hyuki.com
Twitter: @hyuki



「納得のポイント」は人によって違います。ある人は自分が「理解する」ことで納得します。またある人は、理解するだけでは納得せず、実際にものを「作る」ことで納得します。

私自身の「納得のポイント」は「伝わる」ところにあるようです。自分が「理解する」だけでは納得しない。本に「書く」だけでも納得しない。自分の理解を本に書き、それを読んだ読者が「なるほど」と言っただけではじめて私は納得するのです。

ところで、文章で伝えること自体も「ややこしいけれど価値のある」技術ですね。読者に「なるほど」と言ってもらうために大切な技術ですから。そこでまた、私の食指が動き出し『数学文章作法』という「説明文を書くための本」を書きました。「伝える」ための技術を「伝える」ためです。

価値あるアイデアは、それを理解して終わりではなく、作って終わりでもない。

相手にきちんと伝わらなければ意味がない。

私は、そんなふうに思っているのです。

